



リレーコラム 村口和孝氏 第1回 アメリカ企業社会の ダイナミズムに学べ!

ネットバブル崩壊後の
ベンチャー企業

アメリカではネットバブルが崩壊し、その後を引き継いだインフラソフトやオペイカル通信ブームも今は思わしくない。そのような中、一時は注目を集めたネットスーパーWEBVANなど公開会社も、赤字解消の見通しが立たずに倒産した。同時に半導体不況のあおりを受けて、ナスダックの株式公開はしばらく見通しが立たない状況にある。従業員がもらったストックオプションも紙くず同然の企業が多い。

1995年から始まったベンチャー

キャピタル（VC）投資ブームも去年秋頃から沈静化。今では逆に、既に多くの投資先を抱えているVCたちは、

投資先の選別とリストラあるいは追加支援でしばらく大忙しの状況にある。

それに比べると、日本は遅れて新規公開ブームが来た分、ナスダックジャパンや東証マザーズの好ましい競争もあって、まだまだ株式公開に可能性のある状況が続く。たまたまIT革命がアメリカに比べ遅れたのが幸いだった。しかし、ここに重大な視点が見落とされがちだ。いくらアメリカのVCやベンチャー企業が厳しい状況下にあるといっても、単にその状況を何もしな

いで傍観しているほど、彼らは生易しい連中ではない。VCはまだまだ投資資金を持っているのである。

リストラが必要なら全速力で実行する。技術力はあるが公開の見込みがないなら売却する、あるいは複数のベンチャーが合併して強みを活かすなど対応の動きは迅速だ。未来への対応が既に始まっているのだ。この対応の迅速さとダイナミズムには驚かされる。日本もおちおちしては行かない。



ベンチャーキャピタリスト
村口 和孝氏

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ（NTVP）投資事業組合代表。「日本のエンジニアの技術を世界に」を合言葉に、ベンチャー企業支援に努める



リレーコラム 村口和孝氏 第2回 日本人は保守的な 農耕民族に非ず

日本人の実像を示す
いくつかの実例

「日本人は保守的な農耕民族」という言い方を聞くことがある。しかし、本当なのだろうか。今回はそれを考えてみたい。

まず、現在日本に専業農家は非常に少ない。それどころか、自給率が低い国として知られ、自給率の引き上げが国策にもなっている。なぜその現代日本人が農耕民族と言えるのか？

確かに、過去の歴史において我々の社会が稲作を特徴とする農耕社会であったことに疑う余地はない。しかし、

これは日本だけのことだろうか。産業革命以前は、東西を問わずこの文明も農業が中心であったし、ことさらアジアにおける産業革命をリードしてきたのは日本だったはずだ。

また、日本の捕鯨や北洋漁業など漁業は世界に冠たるものであるし、しかも明治以来の工業化が世界のどこよりも加速度的に進行し、いまや世界中に日本の工業製品が溢れ返っている。世界的にその業態が有名な商社も舞台は世界だ。それなのになぜ日本人は農耕民族で保守的か？

このような事実を照らして考えてみれば、日本人が農耕民族で保守的であ

る証拠などほとんどない。むしろそこから浮かび上がるのは、「羊の顔をしてその実、体は猛獣」という珍獣の姿すなわちこの話にはごまかしがあるのだ。

読者諸君は経済活動をする上で、決して「自分は農耕民族で保守的だ」という誤認識をもとに意思決定してはいけない。少なくとも現代日本人をそのように捉えている人は世界にはいないのである。



ベンチャーキャピタリスト
村口 和孝氏

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ（NTVP）投資事業組合代表。「日本のエンジニアの技術を世界に」を合言葉に、ベンチャー企業支援に努める



リレーコラム 村口和孝氏 第3回 とどまるどころを知らない “脱大企業”のトレンド

ネットバブル崩壊。しかし
大企業中心経済には戻らず

昨今、「ネットバブル崩壊」などベンチャー経済の変調が新聞を賑わしている。いったん、大企業を去り、ベンチャーに転職した人たちが大企業に復帰し始めているとも聞く。今回は、ネットバブルが崩壊した結果、日本が大企業中心の社会に戻るのかどうかを考えてみたい。

いま、日本では小泉内閣の下、官庁や地方、特殊法人を巻き込んだ戦後最大の改革が始まろうとしている。これは、「変だけども長いものには巻か

れる」「臭いものには蓋をせよ」と放置されてきた不合理な世界と決別する時期がやってきたことの表れである。

これはある意味で、合理性がこれまでのジंकクスや既得権益の上にあぐらをかいてきた世界を突き崩す、すなわち市場経済が官庁や政治にまで押し寄せてきた結果と考えられる。この市場化の流れは、東西冷戦構造終結以来の世界史を動かしてきたビッグトレンドであり、ネットバブル崩壊程度でこの潮流が変わるとはとても思えない。

このことは、一流大学から一流大企業に就職し、一度既得権益を得たら何十年も安閑としていられるという時代

が過ぎ去ったことを意味する。さらに、これまでと違って大企業も構造的な不合理を抱えたまま、不沈空母である政府の支援でなんとか経営を維持し続けるといった、過去の芸当が通じなくなる。

世界の流れからして、「大企業からベンチャーへ」というビッグトレンドは、実は終わらないどころかますます進むと思われる。



ベンチャーキャピタリスト
村口 和孝氏

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ (NTVP) 投資事業組合代表。「日本のエンジニアの技術の世界に」を合言葉に、ベンチャー企業支援に努める



リレーコラム 村口和孝氏 最終回 環境が変わっても 遅しなく、しなやかに生きる

悔れない
人間の底知れぬ適応力

人生の中で20〜40歳の時期ほど社会人として大きな意思決定をする時はない。就職、結婚、転職、独立など、あとになってみれば人生を左右する重大な意思決定の連続である。私自身、39歳で14年勤めた会社から独立し、ベンチャーキャピタリストという、若い世代の起業に関わる仕事をさせていたにいたる。独立してよかったと思う反面、20代・30代は損益の中において随分悩んだな、何で悩んだのだろうか、悪い出しておかしくなることもある。

サラリーマン生活が長くなると、今いる会社にいないと福利厚生が充実しない、給料が安定しない、家庭や友人関係がついてこない、仕事がうまくいかなくなるのではないかなど、細かいことにネガティブになり、何年も同じ会社生活を続けてしまいがちだ。

実際、転職したり独立して組織から離れると、確かに給料が上下したり、通勤手段が変わったり、住宅手当の制度が変わったりして一時的に混乱する。しかし、転職を経験した者なら誰しも「自分や家族の、環境変化に対する適応力」に驚かされることになるだろう。この適応力は決して過小評価す

べきものではないのである。カギは人間の底知れぬ適応力だ。

人間は想像以上の適応力を持っている。日本人は農耕民族で保守的であるどころか、世界で培った逞しい競争力を持っている。初めての海外旅行で心配を抱え込んでいる大学生のようにならず、時には出たところ勝負で、遅しなくしなやかに生きていける人生を、読者には歩んで欲しい。



ベンチャーキャピタリスト
村口 和孝氏

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ (NTVP) 投資事業組合代表。「日本のエンジニアの技術の世界に」を合言葉に、ベンチャー企業支援に努める